

碎石だらけの駐車スペースで目につくのに地面を這うように広がり小さな白い花が咲く草がある。それが何かを見分けられる知識が無いのはもう何度も書いたことだ。「北海道の野の花」という図鑑を買って調べようとするのだがなんせ千百三十二種も収録されているので、そこから目的の草を探し出すのは至難の技だ。少しでも知識があれば何々に似ているということから絞り込むことが出来るだろうが、それができないので一ページ目から順に探してくしか無い。大概は途中で挫折する。運が良く似たようなものに出会ったとしても、その前後には同じく似たような草が並んでいてなかなか特定できずに終わってしまう。私より妻の方が圧倒的に草花の名前を知っているのだが、いちいち聞くのも気がひけるといふより聞いてふむふむとわかったような気になっても明日には忘れていく。そんな時に出会ったのがスマホのソフトで、写真を撮ると瞬時に名前を教えてくれるという優れたものだ。ソフトが特定した草花の名前を図鑑で再確認するのだが、最初のころはご愛嬌のような間違えが結構あった。それがAIを活用しているとのことなのでだんだん精度が上がって最近ではピタリと当ててくる。このソフトを頼りに腰を屈めて碎石の中から顔を出している草花をパシャパシャしながら見て歩くのは私でも楽しめる。

そのソフトによると先ほどの小さな白い花が咲く草はゲンノシヨウコという名前のようなのだ。ゲンノシヨウコは「現の証拠」と書くらしい。これは何かの事件と関係があるのかと図書館からまとめ借りをしてきた雑草図鑑六冊を頼りに調べると、薬用に用いられる草で、すぐ効き目が現れるということからその名がついたとある。それがどうして現の証拠なのか今ひとつピンとこないのだがまあそういうことのようなのだ。おなじように地を這うように広がる草を見つけた。こちらは小さな黄色の丸いかたまりの周りに白い花びらのようなものが五枚ついていて可憐な趣だ。さっそくソフトに聞いてみるとなんとハキダメギクという名前だという。漢字にすると「掃溜菊」。図鑑を総合すると大正時代に渡来した帰化植物で花の黄色の丸いかたまりはそれ自体小さな花の集まりだという。そのせいか繁殖力が旺盛で一年で三、四世代まで子孫を広げるようだ。それにしても掃溜菊とはかわいそうなネーミングだ。図鑑によるとこの名前をつけたのは牧野富太郎だとある。牧野といえば「雑草という名の草はない。」という言葉を残し、その言葉が教育界などで個性尊重の代名詞のように使われているのだが、その人がゴミ捨て場に生えているのを見つけてつけた名前が掃溜菊では、名前がなかった方が良かったのではと思ってしまう。この牧野先生、ネーミングには独特のセンスがあるようで、我が家の畑の端っこに生えている春先に青い花を咲かせるのがあるが、それはオオイヌノフグリだと言う。ヨーロッパ原産の帰化植物だが、在来種はイヌノフグリと言い牧野先生のネーミングだそう。これはふくつとした実が二個つくのだが、それを見て犬のタマタマに似ているということで名付けたと言うことだ。これも美しい青色の花からするととつと別のネーミングにしてあげて欲しかった。

